

民具 2 (ガリ版印刷)

大野城市教育委員会



ふれあい歴史体験「ガリ版で字を書こう」

上の写真と感想は、平成13年2月、「ガリ版で字を書こう」という「ふれあい歴史体験」を実施したときのものです。参加したガールスカウトの子どもたち（小学1～3年生）は、目を輝かせて説明を聞いたり印刷が一枚できるたびに歓声をあげたりしていました。

丁寧に手書きした字や絵が、力の入れ具合やインクのつけ方によって美しく印刷されてくるために達成感を味わっているようでした。体験後の感想は手づくりガリ版の特長が表現されています。

現在は、コピー・パソコン・ワープロなどを使って手軽に印刷できますが、一字一字自分で書き、インクをつけ、ローラーを転がして作成した印刷物に特別な感動を持っているようでした。

ガリ版は、正式には^{とうしやいんさつ}謄写印刷といい、^{げんし}原紙にたくさん穴をあけて印刷する^{こうはん}孔版印刷の一種です。明治27年（1894年）、滋賀県の堀井新治郎父子によって発明され、ふたりの出身地^{がもう}蒲生町は、謄写版^{ほっしょう}発祥の地となっています。堀井父子は、発明完成と同時に堀井謄写堂を創立し、販売しました。大野城市に寄贈された謄写版の中には、「サカタ謄写版」「ジッパー謄写版」の名はありますが、「ホリイ」の名が入ったものはありません。

ガリ版は、昭和30年代頃まで身近な印刷機として学校や印刷所で盛んに使用され、同人雑誌や広報ピラなどの作成にも活躍していました。大量の部数を印刷することには不向きですが、読み手に対する心づかいが伝わる印刷方法として大切な役割を果たしていました。

今、ガリ版で印刷する人は、日本では絶滅に近い状態ですが、東南アジアに渡って『トーシャパン』と呼ばれ、生活に欠かせない道具として活躍しています。

体験後の感想

- ガリ版印刷は、自分が書きたいと思う字や絵が自分の手で印刷されるのですごい。
- 自分が書いたものが印刷されるのでうれしかった。でも、むずかしいところもあった。
- 印刷が終わった後も、服や手にインクがつかないように気をつけた。おもしろかった。



ガリ版で使う道具



鉄筆のいろいろ



ガリ版で作った作品

ガリ版印刷に必要な道具は、謄写版(写真①)・インク(写真②)・ローラー(写真③)・原紙(写真④)・やすり版(写真⑤)・修正液(写真⑥)・鉄筆などです。

字や絵をかくには、まず、やすり版の上に、薄い紙にろうをぬったろう原紙を敷き、鉄筆で原紙に線を引きます。

この時、鉄筆とやすり版がすれあつて、ガリガリと音がします。そのために「ガリ版」と呼ばれるようになったようです。

やすり版は、目の方向・大きさ・粗さに違いがあります。鉄筆も太字用・

細字用・ぬりつぶし用があり、目的に応じた使い分けが必要です。大切なのは、力入れ方です。一定の力で書かなければ正しく穴があかず、印刷がかすれてしまいます。

思いどおりの字や絵がかけるようになるには、技術の習得がいるのです。

字や絵ができたら、次は印刷です。謄写版の一番下に用紙を置き、用紙の上に出来上がりを考えて原紙の位置を決めます。決まったら、網がついた枠をおろして重ねます。網の上にインクをローラーですき間なく延ばします。インクが全体に行き渡ったら、試しに網の上でローラー

を転がします。枠を一旦上げて、正しく印刷されているか確かめます。インクのつき方が悪いときは、数回試し刷りをし、最適な状態を選んで、原紙がずれないように止め金でとめます。この後、必要な部数をすばやく印刷します。紙に均等に圧力をかけ、一枚刷るごとに枠を上げ、親指で紙をめくっていきます。この時、用紙をすばやくめくる熟練の技が生きてくるのです。

左の写真は、ガリ版印刷による作品です。

ガリ版印刷は、今後「手作りの温かさが感じられる印刷文化」として謄写印刷の捨てがたい魅力が再評価されてくるのではないかと考えられます。